

## 公共空間における音声表現は、なぜ「節まわし」になるのか

小池 保

### Why do the oral expressions in public spaces of Japan have the peculiar melody?

KOIKE Tamotsu

#### Abstract

In the Japanese society, which has a unique culture of disseminating a multitude of messages over loudspeakers in public spaces, crude oral expressions flood stations, commercial districts, and department stores. This thesis will analyze the depth of the relationship between this phenomenon and post-war Japanese language education. Furthermore, based on its criticism, it aims to offer a proposal to Japanese language education by highlighting the importance of the methodologies of appropriately expressing orally the emotions behind words.

**Key Words:** "The Real" "The peculiar melody" "Japanese language education" "Reading Silently" "How to play words"

#### [ 要約 ]

戦後の日本社会で進められた効率化は、いわば「脱リアル」の過程でもあった。言葉から「リアル」が抜け、希薄化していった。

国語教育での効率化は、活字化した書き言葉を中心にすることによって進められた。しかし、論述文はさておき、より立体的な言葉の世界＝「作品」の読解に当たっては、音声表現のための「適切な方法論」によって、書き言葉の中に横たわる「リアル」を、立ち上がらせてやる必要があった。にもかかわらず、活字をもとに声に出す時にとられた方法は、単なる「黙読の音声化」(黙読時の頭の中での読みを、同時に声にも出してゆくこと)に過ぎず、しかもその表現には、「節まわし」という奇妙な音楽性がつきまとっていた。

「黙読の音声化」は、特異な「身体性」をつくり上げ、マイクとスピーカーを通し、粗雑な音声表現を、公共空間にタレ流すことに貢献してきた。この論文ではその因果関係をたどり問題点を抽出した上で、音声表現のための「適切な方法論」のひとつを提示する。

キーワード: 「リアル」「節まわし」「国語教育」「黙読」「言葉の演奏法」

はじめに

情報を伝える論述文はさておき、感動を伝える「作品」に関しては、音声表現によって言葉を「適切に演奏」することが本来は不可欠であり、そこに深い読解が成立する。当論文では、活字の黙読に頼りきり音声表現を忘れた国語教育が、どんな身体と社会をつくり上げてきたか、音声分析も用いながら検討した上で、国語の読解に必要なはずの「言葉の適切な演奏法」と、それが持つ感動へ導く力について、詩人のまどみちお氏の作品「ぞうさん」を通して検証する。

## 1. 戦後の国語教育における、音声表現の「脱リアル」化

### 1. 1. 国語教育をとりまく大状況～戦後社会の効率追及と「脱リアル」の進行

「リアル」という言葉を本稿では、「歴史や風土、習慣などの影響が絡み合った、存在感の強い独特な『意味』」と規定して使用する。その意味での「リアル」の存在感とは、そもそも重ったるいものである。

例えば、「効率」を意識化して進めてきた戦後の教育現場にとっては、「普通の子」がよしとされ、扱うにもエネルギーが必要な、「リアル」な子は、どちらかと言えば鬱陶しく、「平均値をはずれた子」として敬遠される存在となった。まさに「ダイヤモンドの原石をはじき出している」面がある<sup>1</sup>。

つまり効率追求の場面において、「リアル」とは、「非」効率的に映り、何らかの「対処」が必要なものとして意識されがちである。相手への配慮を示す表現である敬語が、大切だが面倒な言葉と意識され、だんだん流行らなくなりつつあるのも、効率化と直結した「省エネ」意識と無関係ではあるまい。例えば、「お話になる」という尊敬表現を、「話される」で済ます。「いらっしゃる」や「お出かけになる」が、すべて「行かれる」に集約される。敬語的言いまわしの多様さ複雑さを避け、「れる」「られる」だけで済ませたいという、省エネ意識のあらわれである。「あなたも、いかれたのですか？」と聞かれて目を白黒させる言語感覚の人は、次第に少数派にならざるを得ない。

生活全体に目を転じれば、戦後における近隣コミュニケーションの劇的な変化が、その例としてあげられるだろう。私たちは、戦前・戦中の、隣り組み制度や大家族制度などに見られた「濃厚でリアルな人間関係」との訣別を決めた。それまでの歴史や風土とは、一線を画すことにした戦後の社会は、スッキリ・サッパリとした人間関係や、近隣とのコミュニケーションを求める「対処」に出た。いわば「脱リアル」のコミュニケーションの追求である。

一方で生活自体も、核家族を電化する、さまざまなモノの登場によって、急速に「効率化」されていった。真っ白な洗濯機や冷蔵庫は、スッキリ・サッパリの「脱リアル」の清潔マイノリティと重なって興味深い<sup>2</sup>。

その結果、地縁・血縁の社会は次第に崩れ、隣り近所とのつき合いに関しても、急速にドライで希薄な関係を好む方向に変化していった。「隣は何をする人ぞ」。このことばマスコミに登場を開始したのが、戦後間もない昭和30年代である。「団地族」という新語が、週刊朝日に初めて掲載されたのは昭和33年。「カギっ子」ということばが生まれたのも、この頃である。こうして、「立ち入らない・立ち入られたくない」意識が、特に都会の中で一般化してゆく。そもそも生活とはリアルなもの。しかしその生活にまわりつく「リアル」の温度はできるだけ下げてしまいたい。そうした「脱リアル」の「無意識」と、「効率追求」の戦後社会の「意識」との間には、表裏一体の関係が成立していたのである<sup>3</sup>。

## 1. 2. 国語教育の中で進んだ「脱リアル」～音声表現との乖離

「効率化」と抱き合わせになった「脱リアル」を、意識・無意識に進めてきた戦後社会。国語教育においても、同様の変化が見られた。国語教育における「効率化」への意識が目立ったのは、「書き言葉」「活字」中心の教育であった。リアルで立体性をもった話し言葉とは違い、書き言葉は平面世界だから扱いやすい。この普遍性の高い記号は、話し言葉とちがって、「動きまわらない」。活字中心でいけば、繰り返しの検証など、科学的アプローチも可能である。「書き言葉」「活字」がもたらす効率性は、まさしく「脱リアル」なのである。だから教育が求める「効率」のマインドとは、極めて相性が良かった。

こうして戦後の国語教育の現場では、「肉声」への注目度が次第に落ちてゆく。戦後しばらくの間、わずかながらも確保されていた音声表現の試みは姿を消していった。やがて「黙読による読解」一辺倒の時代が来る。音声表現との乖離である。この「脱リアル」の方法は、受験中心に組み立てられた学校教育の中で、「効率化」の主軸に据えられることになった。

ごく最近になって、話し言葉の教育も大切だとの考え方が持ち込まれ、音声表現との乖離に対する反省の声も出始めた。しかし教育現場では、長年にわたり肉声への着眼すら失っていたために、音声を活用する教育の方法論の、模索や議論には、さほどの進展は見られない。当然、教育者の間では、方法論が共有されることもなく、練磨される可能性も、極めて乏しい状況にある。

方法論がないとなれば、音声表現はいきおい、「自己流」になる。最近のベストセラー本のタイトルに刺激されて、たまたま「声に出して読みたい」と考えたとしても、教師も学び手も、書かれた言葉を、目に入った順に（上から下へ、あるいは左から右へ、活字の上に視線をスライドさせながら）、大きな声で音声化するのが、せいぜいである。これが「黙読の音声化」である<sup>4</sup>。

しかしそれでは、真に「音声化」し、肉声で表現したことにはならない。活字化して言葉を紙の上に寝かせたときに、書き手の肉声や心のなかでの内語にこもっていた「リアル」は、いったんフリーズされ、言葉の立体性は、紙の上におさえ込まれているからだ。

論旨に重きをおく論述文であれば、活字の黙読でも、あるいは「黙読の音声化」でも、さほど理解に問題は生じない。しかし、彫りの深い立体性をもった「作品」の読解に当たっては、適切な音声表現を実現するための方法論によって、言葉を解凍し、再び立ち上がらせ動かしてやる必要がある。ちょうど楽譜に印刷された音符が、適切に演奏され、音楽としてのリアルと立体性が回復され、虚空に解き放たれるのを、心待ちにしているように。

しかし効率主義に立った国語教育でなされた音声表現は、せいぜい「黙読の音声化」、つまり頭の中で追う文字を、順ぐりに音声化してゆくだけの、「自己流の演奏法」に過ぎなかった。「言葉のリアル」に忠実な方法論＝「言葉の適切な演奏法」の探求には、人々は不熱心だった<sup>5</sup>。繰り返すが、効率のマインドにとっては、「リアル」は鬱陶しいものだからだ。

こうして、「言葉のリアル」に鈍感な「自己流の演奏法」が、「脱リアル」の活字が満載された教材を介して、教師から学び手の「身体」に伝染し、刷り込まれていった<sup>6</sup>。

## 2. 音声表現の「脱リアル」は、どのように進んだのか

### 2. 1. 戦略型の「脱リアル」～ケータイ着信音の、公共空間への進出方法

国語教育に関する議論に意味ある視点を手にするために、いったん視野を公共空間全体にまで広げてみよう。そのことによって、公共空間に流されている様々な音声表現（パブリックな場面での、マイク・スピーカーなどを使った音声表現）が、「脱リアル」を実現するために、どんな「方法」をとっているのかが、認識できる。

とりわけ、最近になって公共空間の表舞台に登場してきた新参者、「ケータイの着信メロディ」についての考察が有効だと考える。着信メロディ（以下、着メロ）が誕生し、いっきょに公共空間でのお馴染みを獲得してゆくまでの過程には、「リアル」ゆえに鬱陶しがられた「音声による表現」が、「脱リアル」によって効率社会に浸透してゆくまでの経緯が、コンパクトに辿られているからである。そこに示されている「方法」は、国語教育における音声表現の問題点を分析する場合に、意味ある視点を提供してくれる。

日本での着メロの人気ぶりについては、言及する必要もないほどである。まず、自分で曲をケータイに入力するためのマニュアル本が、98年7月から発売され大ヒットした。一時は20数社から百数十冊のマニュアル本が出て、2000年6月の段階では、シリーズ14冊目で550万部を売り上げたものまで登場していた。その後、携帯電話会社によるダウンロードサービスの人気主流となり、毎月新たな楽曲が追加され続けている。どの会社も数字を明らかにしてはいないが、膨大なアクセスがあることは言うまでもない。

ケータイの着信音が音楽性をまとい、メロディ化してゆくのは必然だった。なぜなら電話の着信音は、「かかってきたから早く出ろ！！」という、有無を言わせぬ“指示力”を持つ

ており、その意味で、「リアル」の度合いがきわめて高い、鬱陶しい音声表現だったからである。いまでも時折、テレビドラマの中で、昔ながらの着信音が鳴ることがある。多くの身体は、自分にかかってきたのかと、ハッと身構えてしまう。それほどに電話の着信音は、強いリアルをはらんでいる。だからとりわけ鬱陶しい。

90年代半ば、公共空間にデビューした携帯電話の着信音が、しばらくのあいだ嫌われ者だったひとつの理由は、まさにその点にあった。思いもかけぬ身近なところで、突然リアルな着信音を鳴らすからである。しかしこの新参者には、ハイテクが味方についていた。その技術力によって、ケータイの着信音には、早い段階から「音楽性」がまとうされた。「音楽」とまではいかないが、ある効力をもった「音楽性」である。その効力が、「脱リアル」の実現なのである。

その後も音楽性を高めるべく、次々とハイテク技術が導入され、まだまだ完全にはないにしる、「脱リアル」を進めつつある。さらに着メロがとった「戦略」効果によって、ケータイはある種の美談の主になることもできた。「迷惑千万といわれた着信音は、ここまで人に優しくなれるよう、努力しました」。着メロは、「脱リアル」を「戦略」的に進めることによって、現代社会では抗しがたい優しさの論理までも演出し、公共空間の懐柔を進めつつある。

## 2.2.「非」戦略型の「脱リアル」～その他の音声表現が、公共空間に溶け込む「方法」

ケータイ着信音を例に考察したことによって、いくつかの点が浮かびあがる。まず、着メロのサクセスストーリーから、「音楽性」のもつ役割をピックアップできる。もうひとつは、ハイテクを武器として活用するという、「戦略」の存在も確認できた。

しかし、公共空間に流されている、そのほか多くの音声表現たちは、着メロのような、「戦略」を持ち合わせているわけではない。ぜひ思い起こしてほしい。スーパーやデパート、駅やホームや電車内でのアナウンス、地域防災無線のシステムをインフラとする様々な呼びかけ（「早くお家に帰りましょう」などの夕方のメッセージも、このシステムによって発信されている）、繁華街や観光地に溢れる暴力的なラウドネス……。彼らの味方についているのは、お世辞にも上等な性能とは言えない、マイクやスピーカー。つまり「ローテク」であり、そこから発せられる粗雑な音響だけなのである。

繰り返して確認すれば、彼らが公共空間に適応する唯一の方法は、「音楽性」、それも「奇妙な音楽性」なのである。後述するように、彼らはそれだけによって、鬱陶しい「リアル」の温度を下げ、曲がりなりにも「脱リアル」の状態をつくり出している。しかも、戦略という「計画性」などカケラもないわりには、「いつの間にか」公共空間に入りこむ。中には顔をしかめる人がいてもお構いなし。アミーバーのように、カビのように、私たちの公共空間のあちこちに、「いつの間にか」はびこっている。よほど意識的にならない限り、そのイン

ペーダーぶりを忘れてしまうほどだ。「戦略」もなく、音も粗雑なのに、「日常の風景化」に成功している。気づかれにくい「秘密」が、まだどこかに隠されているに違いない。

「非」戦略型である彼らの音声表現には、「脱」という積極的なニュアンスは、もちろんふさわしくない。いわば、「リアル」はもともと抜けていた。つまり「リアル抜け」、なのである。「リアル抜け」した音声表現が巷にニューロンを拡げることによって、社会は結果として、「脱リアル」の状態に置かれるという寸法である。この音声表現として「リアル抜け」した状態が、粗雑な音響の応援しかないにもかかわらず、「日常の風景化」に成功している背景にある「秘密」なのである。同じ人間なのだから、「リアル」な言葉には誰も反応してしまう。しかし「リアル抜け」したメッセージであれば、平気で聞き流せる。だから巷では、「聞き流す」身体が、次から次へと通り過ぎてゆく。このようにして、「リアル抜け」メッセージの送り手と、大勢の「聞き流す」身体とが、何ら「実効を期待していない言葉」あふれる公共空間を、形成しているのである。

着メロの「音楽性」は、戦略という「意識」によってもたらされた、「無機的」で乾いたもの。公共空間に流されているその他の音声表現に付随する「音楽性」は、戦略なき「無意識」によって生み出された、「有機的」で「ブヨブヨ」とした奇妙な質感のものである。その「無意識」の発するところに、無意識なるがゆえの「身体性」が潜んでいるのではないが、さらにその背景に、実は戦後の国語教育が絡んでいるのではないか。本稿では、そのように疑っているのである。

そこで次章では、その「奇妙な音楽性」と「身体性」の関係について探ってみよう。

### 3. 「脱リアル」の「音楽性」の分析

#### 3. 1. 公共空間に流される音声表現が、なぜ「節まわし」になるのか？

「奇妙な音楽性」とは、「節まわし」と言いかえることもできる。いずれにしても、卑俗なレベルのものである。けっして洗練されてはいないし、今後も洗練に向かう可能性は、極めて低いはずだ。そこが、これからさらにリファインされてゆく可能性がある着メロとは、違う点だ。ただし、中には馴染み深さを感じさせるものもある。「上野オ～、上野オ～」など、駅のアナウンスの節まわしの一部には、郷愁の味わいを聞きとる人も少なくないからだ。しかしそれも、かつて駅のアナウンスを、それなりに洗練させようと試みた人々の、「文化」の余韻に過ぎない。そのような「芸の冴え」を目ざそうという駅員さんは、昨今あまり見当たらない<sup>7</sup>。

「リアルの温度を下げるから、優しく指示・伝達する力が生まれる」というような、着メロと同じ効果が、公共空間に流されている諸々の音声表現の『音楽性』によっても発揮されて

いるんじゃないですか？」「もしそうなら、それはそれで結構なことなんじゃないですか？」 そんな弁護の声が出てくるかもしれない。しかし実際は、そうなのではないのである。

その問題を論じるために、「節まわし」について、より突っ込んで検討してみたい。JR 中央線などの各駅のエスカレーター昇降口でいつでも聞くことができる、録音されたアナウンスを素材に、具体的に見てみよう。以下は、そのアナウンス録音をもとに文字化し、その冒頭部分を抜粋したものである<sup>8</sup>。

エスカレーターに  
お乗りの際は、  
手すりにつかまり、  
黄色い線の内側にお乗りください。

当論文末尾に添付したグラフに示された音声曲線は、上段、下段のグラフともに、NHK 放送技術研究所の音声分析装置にかけて、視覚化したものである。グラフ縦軸の数字は、音の高低のピッチを表している。

上段のグラフ = 実際にエスカレーター昇り口付近に設置されている小さなスピーカーから流れる、録音されたアナウンス音声から得られた波形を示したもの。

下段のグラフ = 同じ原稿をもとに、「リアル」な発話を試みた場合のもの。このアナウンスの音声化は、元 NHK アナウンサーの筆者が担当した。「リアル」というと高尚に聞こえるかもしれないが、要は「言葉の文脈上の思いや意味を大切に、それがよく伝わるよう、意味の通りに、普通に、意味に素直に発話」することをポイントとしている<sup>9</sup>。

いずれも、曲線全体の傾向が把握できれば十分なので、言葉の細部が波形のどこに対応するのか、正確な 1 対 1 対応にはこだわらず、大まかに示すにとどめた。

では「節まわし」とは、グラフ上にどのような形で現れてくるのだろうか？

まずは便宜上、「エスカレーターに」の部分だけに注目しながら、別紙・上段のグラフの波形を見てみる。「エスカレーター」の「エ」と、低めの音で出たあと、まずは最初の山が現れる。更に「カレー」あたりで、より大きな山と坂をアップダウンした後、もうひとつ名残りの小山を描く。そして「レーターに」あたりで、グラフはようやくウネりを止め下降線をたどる。

実際に耳で聞いた印象と照らし合わせてみる。その場合も、「エス」と比較的低く入ったあと、「カレー」の箇所、音を振りまわすような強引さを伴って、ウネり上がっているこ

とに気がつく。

グラフで見ても、駅で録音による実際の音声聞いてみても、名詞と助詞の、たったひとつのコンビネーションを声に出すだけで、こうになってしまうのである。しかもこのウネリが、文節ごとに次々と続けられてゆく。だから音声につき合って、注意しながら聞いていると、とても疲れる。やがて人々は、「つき合っちゃ、いられないナ」と、ふと思う。その瞬間から「聞き流す」ようになる。これが「節まわし」という音楽性が、戦略も持たずして、「いつの間にか」社会にはびこるメカニズムである。まっとうに聞く気持ちを萎えさせる「音楽性」の、これがグラフの上にとらえられた痕跡なのである。

### 3.2. 「節まわし」の音声を分析する

～ “リアル”の発話”と“リアル抜け”の節まわし”の本質的違い

ところが「エスカレーター」という単語を、「リアル」に、つまりごく普通にしゃべってみると、事情は違ってくる。言い方を少し変えれば、「エスカレーター」という単語の意味にそって、リアルなモノに即して、ごく率直に発話してみると、グラフの様子は変わってくる。

こういう要領である。自分が誰かから、「これは何ですか？」と、実際に質問されたと仮想する。見ればエスカレーターがそこに「ある」。これまた仮想である。実際にそこにエスカレーターが「ある」のだから、質問に「リアル」に反応することができる。俳優がリアルにセリフを言おうとするのと似た試みである。「ああこれですか。これはエスカレーターです」と答える。つまり「エスカレーター」という“モノ”を、意識の中心に明瞭に置いた状態で、「リアルに発話」する。“モノ”の存在を「リアル」に意識化した上であれば、俳優でなくとも、「エスカレーター」という名詞程度は、力みなく素直にリアルに発話できる。なぜなら、ふだん、そのように話しているからである。

入り組んだ説明になったが、要は「エスカレーター」という単語を、意味を、「普通」に「リアル」に発話してみると、どうなるのか、ということなのである<sup>10</sup>。

そのように発話された下段のグラフの対応箇所を見れば、グラフの波形の山が、あちこちで突出することはない点に気づく（ピークもさほど高くもない）。

「エスカレーターにお乗りの際は」という、主語としてのまとまりの全体にまで、発話の対象をひろげてみても、全体としてみれば右肩下がりのイントネーションで発話される<sup>11</sup>。

しかし、実際に駅に流れる録音アナウンスでは、文脈を反映した、言葉の「リアルな意味」とは無関係な強調が、始めから最後まで、随所に高低（日本語は高低のイントネーションである）のウネリとなって、間歇的に現れてくる。このため、「エスカレーター」のような単語のレベルだけで見ても、「意味」を、その意味の通りに発話したときに、「芯」として入っ



てくるはずの、右肩下がりの傾向が認められない。同様に、意味を3つの小さなまとまりに区切って分析してみても、「芯」は確認できない<sup>12</sup>。高いピークの山また山。蛇がのたうつようなグロテスクな曲線を描くばかり。これこそが、「脱リアル」によって生み出される、「節まわし」という音楽性の実像なのである。

#### 4．国語教育と、「節まわし」になる身体との関係

##### 4．1．教育における「活字の音声化」を生む「節まわし」

断るまでもなく、日常会話の中で私たちは、ごく普通の発話の仕方で、無理なくメッセージを伝え合っている。ところが公共空間に流される諸々のアナウンスとなると、「普通の話し方」とはだいぶ趣の違う「節まわし」になってしまう。いったい何故なのだろうか？ 特有のウネるような調子は、ごく普通に発話したときのイントネーションとは、程度の差こそあれ異質である。

理由のひとつには、あるメッセージを公共空間に出そうとするとときに生まれる、「身構え」があることが考えられる。不特定多数の相手にある事柄を話して伝えようという場面では、多くの場合、目の前には書きことばでつづられた原稿をおき、マイクやスピーカーも用意されている。その前には、「身構えた自分」がいる。それらのハードを使わない場合であっても、何らかのバーチャルな原稿やマイクが心の中には存在し、やはりその前には、「身構えた自分」がいる。「緊張」をさし引いてみれば、その身構えの内訳には、その人の「身体性」が深く関わっている。身体性ゆえに、教育の関与が強く想定できる。「教室でやっていたように、大きな声で、発音に気をつけ、しっかり読めばいいんだ」読む場面になると、おのずと動き出す「身体性」である。何しろそれが、音声表現について教わった方法の、「すべて」だったからである。

かくして彼は、ひたすら元気よく「節」をまわすことになる。まさに「昔とった杵柄」である。

そこで次に、「節まわしに無意識に陥ってしまう身体性」が、国語教育のどの部分と、どのような関係性を持って生み出されてきたものであるのかについて、検討してみることしよう。

##### 4．2．1．国語教育における「読み方」を検証する

～言葉のリアルを、適切に「演奏」する力について

まず大事な点を、いくつか繰り返しておきたい。

教育現場一般における効率主義は、「活字中心」という点に集約的にあらわれている。記

号としての活字は、動かないから扱いやすい。印刷物としても流通させやすい。何度でも参照し直し、検討することもできる。聞く端から、消えていってしまう、一過性の音声言語よりも、活字による書き言葉を中心にした方が、確かに教育は効率的に進むよう思われる。

しかし活字の中に込められた、「文脈にそった、思いや意味=リアル」は、紙の上に、いわばフリーズされ、寝そべった状態でおかれている。扱いやすく効率性が高いのは、実は言葉が休眠状態にあり、動き出さないからに他ならない。従って活字による書き言葉を重視する立場ではあっても、便宜的にフリーズされた「思いや意味=リアル」を、何らかの方法で解凍してやるための、「音声表現」の適切な方法論を、共有し伝承し磨き上げることが、本来は活字化とセットにして考えるべきであったのだ。誤解をおそれずに言えば、活版印刷技術が登場した瞬間に、活字の使用と普及に当たっては、音声表現のための「適切な方法論」の開発と実践と伝承とが、いわば「默契」として交わされていたと、言えるのではないか。

それはちょうど、楽譜と演奏の関係とよく似ている。楽譜はいわば書き言葉。五線紙の上では、音符に込められた音楽的可能性は、まだ動かない。「適切に」演奏されてはじめて、音符は生命を吹き込まれて立ち上がり、虚空に解き放たれる。

ところが実際の国語教育の中では、リアルを立ち上げることができる適切な表現方法とは、どういうもので、どのようにして身につけるべきものなのかという問題について、ほとんど議論されることはなかった。むしろ言葉の「リアル」を、音声表現によって適切に解き放つための方法論を、探り実践しようとする人々は、全体から見れば特殊（よく言えばユニーク）な存在だった。そのような試みは、効率主義のマインドから見れば、「非効率」以外の何ものでもないと認識され、広く教育関係者たちの関心を集めなかったのである。だから默契は、いつまでたっても実行されなかった。

当然ほとんどの教育現場では、黙読主体となっていた。それが一番「効率的」だと思われた。もちろん、教師が説明のために読むことはある。指名された学び手が、代表して音声化する場面もある。しかしいずれの音声表現の場合も、活字の上に寝そべっている「意味=リアル」が、目をかすかに開いてくれるかぐれないかのレベルに過ぎない。「リアル」を起動させてやれるだけの表現を、実現できる方法論が教えられ共有されることはなかった。だいいち、それが必要だという着眼もなければ、ましてや探求に踏み出そうという、「奇那人」もいなかった。

国語の教室で示される読み方といえば、縦書きにレイアウトされた活字の場合、上から順に音声化してゆくという体のものだ。うまく（＝間違えずに）読めたとしても、表現としてのリアル度はきわめて低い。いわゆる「棒読み」である。いや「棒」という言い方は正確ではない。先ほどグラフで見てきたように、その音声表現には、「リアルの芯」が入ってあら

ず、プロポヨとしている。随所でのたうつ、「節まわし」の読み方である。

国語の教育者の多くは、書き言葉を適切に目覚めさせるための方法論を持たず、それを探求する必要も感じてこなかった。何度も強調したとおり、その理由のひとつは、「リアル」は鬱陶しく、わざわざ求めるようなものではないと、教育現場では意識されていたからに違いない。

#### 4. 2. 2. 国語教育における「読み方」を検証する

～「ぞうさん」をめぐる、実態的な「読み方」について

さて、国語教育がもっとも重きをおいた、活字による書き言葉の、「読解」つまり「演奏」は、果たしてうまくいったのか？ 魅力的な意味世界に学び手たちを案内するという、最も大事な仕事において、国語教育は成功していたと言えるのだろうか？

戦後の国語教育の中では、授業を効率的に進めるべく、「リアル抜き」され活字化された書き言葉を、節まわしで読み進めるという方法で、とりあえずの「演奏」の作業に臨んできた。

もちろん、それでも十分に読解が成立する分野もある。新聞記事や論述文が、その例だ。あえて粗雑な言い方をすれば、論述文では、「意味」がどちらかと言えばムキ出しになっているから、換言すれば「音声によるリアル化」を前提とせずとも読解できるように工夫されているから、黙読で充分に対応可能だ。それどころか逆に、音声表現しながら繰り返し読む気には、なかなかない。「論旨」だけでは、鑑賞の世界には馴染まないからである。

とはいえ、たとえ言葉は平易であっても、深い読解を要する文章は少なくない。作品と呼ぶにふさわしい、人に語って聞かせる価値のある文章世界だ。例えば、詩人のまど みちお氏の「ぞうさん」の作品の一節である。全部ひらがな。どこにも難しい言葉はない。なにしろ「子ども向けの詩」なのだから、大人が、読解に至れないわけがない…はずである。

では、この詩の世界は、教育の中でどのように読解され、子どもたちに伝えられてきたのだろうか。

ぞうさん

ぞうさん

おはなが ながいのね

そうよ かあさんも ながいのよ

(「まどみちお全詩集」～理論社2001年～に掲載されている「ぞうさん」より抜粋)

この詩をいくら黙読、あるいは棒読み(黙読の音声化)したところで、大した「意味」は立ち上がってこないはずである。「マァ、子ども向けの詩なんだから。かわいくてほほえま

しくて、とてもいいんじゃないですか」。そのレベルの読解であっても、おそらく誰もとがめたりはしない。何しろ、「解釈は自由」なのだから。

おそらく授業でこの詩を教材にした場合には、国際アンデルセン賞を受けた詩人、まどみちお氏の業績にふれたり、子どもたちと大きな声で、とりあえず声に出したりして、終わりにしてしまうのではないだろうか。「ぞうさん」の詩には、大人から見れば、さほどの感動はない。だから、それ以上のメッセージの贈りようもない。そこに授業における、「読解」の「限界」が露呈している。

本当に「ぞうさん」は、「かわいいだけの作品」に過ぎないのだろうか？

さらに問いかけたい。実はこうした感動のない「黙読の音声化」を通して、子どもたちの「身体」に、知らず知らずのうちに「節まわし」が刷り込まれていってはいないのか？ その子がある年齢に達し、何かの機会にあるメッセージを公共空間の場で音声表現しなければならなくなった場合に、その「身体性」が、「身構え」の中に出てきて、思わず節をまわしてしまうことは、ないのだろうか？

つまり、適切な方法論がない自己流の読み方（黙読の音声化）による音声表現には、大きな「限界」だけではなく、同時に、「弊害」までもがつきまとっている、少なくともその可能性が、強く疑われる。そのようには考えられないだろうか？

#### 4. 3. 言葉の「リアル」を解き放つ「演奏法」とは ～「ぞうさん」をめぐる、感動の発見について

「自己流」ではなく、活字の中で休眠している、言葉の「意味＝リアル」を、再び立ち上げるべく、あれこれと音声表現を工夫した場合には、どんな感動を手にすることができるのであろうか。

紙の上に寝そべっている言葉の「リアル」。それを立ち上げるには、「本当にリアルに話そうとする」姿勢が不可欠である。文脈と場面の中で生まれる「リアル」に謙虚であろうとする姿勢である。

単に読む、ましてや節まわしで読むことではない。節まわしとは、自分の「息」の都合でまわしただけの結果である。決して、「意味」の都合に謙虚になった表現ではない。

大事なことは、文脈と場面の中に置かれた言葉の、「意味」あるいは「思い」を、その「意味」や「思い」の通りに、「リアルに発話する」こと。まさしく、「意味」を「思い」を、そして「リアル」を、そっくりそのまま声に出して、解き放つ。言いかえれば、「自分の問題」として「言葉を生きる」。幾通りかある「言葉の生き方」の可能性を、あれこれと試み、最も納得できる生き方を読解の「解」とすることが、重要なポイントである。この身体的な「発話」の営みこそ、求められる音声表現に至る道筋であり、作品世界の「適切な演奏法」の根幹にすえられるべきだと考える。

「ぞうさん」に即して、その方法論を、具体的に当てはめてみよう。

作者自身が生きた言葉を、自分も生きてみたいと考える表現者は、個々の言葉に関して、さまざまな生き方の可能性を試みようとするであろう。例えばやさしい気持ちで、「ぞうさん、ぞうさん」と呼びかけてみる。生意気に、あるいはふてくされながら発話してみる...それぞれの「言葉の生き方」を自分の肉声と身体によって自分に響かせ、これかな、いやこっちなと、何度もセンサーを振りながら、自分の声を自分の心で聴き、メーターが振り切れるような瞬間を探そうとするであろう。そして最後には、自分にとって最もしっくりくる「言葉の生き方」と出会う 「私」の読解は、この積み重ねによって、成就するのである。

いずれの試みも、黙読のように頭の中だけでシミュレートできるものではない。その言葉を生きているときに感じるはずの、「発話の感覚」を、実際に味わい体感する。演劇家がセリフの表現をめぐる苦悶するのによく似ている。ピアニストが実際に音を出しながら、楽譜の解釈のあり方を探し、適切な演奏方法に腐心するのと同じである。人に語って伝えるに足る「作品」の読解には、本来それ相応のエネルギーの投入が要求されるものである<sup>13</sup>。

「発話」の繰り返しによる表現の模索が読解を深め、新たに到達した読解レベルを再び足がかりにして、更により良い表現への模索に向かう。「表現」と「読解」とは、このような往還、自己の経験と原典との、行きつ戻りつの照合の中で、次第に深まりを見せてゆく。その意味で「読解」とは、「私」と作者との深い対話であるとともに、「私」の発見であり、言葉の自己責任の感覚をはぐくむ契機でもある。学校教育の発想の中にはなかった、実に「効率的」で「教育的」な方法だとは言えないだろうか。

では、「ぞうさん」に関しては、そのような読解方法によって、どんな作品世界が立ちあわねてくるのだろうか。

人生経験のセンサーを振りながら探ってゆくうちに、自分の感覚とピタリと重なる瞬間がある。「アッ！ これだ 面白い」とひらめく。詩人も自分も、同じ人間。必ず自分なりに共鳴し合えるタイミングが訪れる。「コミュニケーション」できたと確信したときが、「私」の読解の達成である。恐らくそのときの「読解」は、黙読以上の、ましてや「節まわし」など及びもつかないほどの、成功を収めているはずである。

「ぞうさん」に関して、さまざまな角度から発話の試みを続けた結果、「私」の前にひらけた世界は次のようなものであった。

「ぞうさん」と声をかけた動物は、ゾウ以外の小動物だ。その動物が、少しイジメの気持ちでからかった。「ぞうさん ぞうさん おはながながいのね」 「私」なりにリアルに発話してみる。口調はもちろん、少しイジワルに、である。芝居がからず、過剰な感情をこ

めず、「リアル」に率直に、である。

子ゾウは答える。かすかな悪意を吹きかけられたことには、まったく気づかない。鈍感なのではない。それほどに純真無垢なのである。にっこりと嬉しそうに、「そうよ。かあさんだって長いんだから」と、言葉がこぼれるように口をつく。そういう気持ちで、この言葉を生きてみた。言葉のリアルを「演奏」してみた。その瞬間、不覚にも、大人のくせに、「私」の心は感動でいっぱいになった<sup>14</sup>。

子どものゾウは、自分という存在に一点の曇りも感じてはいない。その理由は、他ならぬ、「大好きなかあさん」の存在なのである。

「ぞうさん」の詩は、存在への全面肯定であり、讃歌であると、読解できたのである。

この作品世界に直に触れたと確信できた瞬間、その人は感動という言葉の語感を直観することができる。表現の模索をあれこれと続けた苦労は、反転して歓喜に変わる。棒読みでは、黙読では、決して到達できなかった高揚感が、心にみなぎる。言葉の「適切な演奏法」によって、作品の世界そのものと合一できた感覚。これを得ることこそが、最高の「効率」の実現なのだと、明確に認識できるのである<sup>15</sup>。

## 5. 国語教育の可能性を拡げるために

### 5. 1. 1. 戦後国語教育の、ひとつの総括～「脱リアル」教育がつくり上げてきた「身体」

書き言葉の「読解」に重きをおいてきたはずの教育は、我知らず「読解」に失敗していたのかもしれない。そのように考えを進めてくると、もうひとつの疑問と不安が、浮かび上がってくる。「作品」の真の「読解」に失敗してきたばかりか、活字をもとに記述された順に音声化してゆくだけの表現が、実はかなり特異性を持った身体を生み出してきてしまったのではないだろうか。

それは、目から入った情報を、脳（自己の精神）をごくごく軽にかすめるだけで、口から音声として放出してゆくという身体だ。教師が示してくれたように、「調子」で、とりあえず「読む」。情報が目から入り、口から出てゆく。その繰り返しによってつくり上げられてきた「身体」である。

この身体は、「意味」で「話す」という「言葉の演奏法」の重要性を、体験したことがない。「調子」でやみくもに「読む」ことしか経験していない。だから、意味とは無関係な強調を重ね、イントネーションをグロテスクにウネらせても、まったくの不感症である。聞く方も鈍感で、音声表現を批判的に評価できる耳を持たない。まさに、「先生もみんなも、こうやって読んでいたし、現に今も読んでいる」のだから。

しかしこれでは、「表現」の模索が「意味」との出会いを促し、ある気づきに至る、つまり「深く分かる」という契機は生まれがたい。高度成長期に仕立てられた教育新幹線「こうりつ号」は、表現の浅場をひた走り、着いたところは、「分かったつもり駅」に過ぎなかったのかもしれない。乗客である学び手がつくり上げたのは、記述された言葉を順番に、節まわしをつけながら読み飛ばす身体。浅い理解に何の疑念も懷かない、「分かったつもり」の身体。活字は読めても、「思いや意味の世界」には至れない身体。同時にそれは、思いや意味の世界に謙虚な身体ではなく、自分の「息」の都合に、作品の世界を従わせるという、「自己本位の身体」でもあり、聞き手に対しては、「あとは自分で、頭の中でうまく繋ぎあわせてね」と言わんばかりに、口から発した言葉の、断片に次ぐ断片を丸投げするだけの、「他人まかせの身体」でもある。その上さらに、目から入った文字情報を、自己の精神を通過させずに口から声に出すという、言葉に対する「自己責任」の感覚が乏しい身体 どれをとっても、「効率化」と「脱リアル」を得意技としてきた戦後60年のニッポンが見せている、負の側面である。

#### 5. 1. 2. 戦後国語教育の、ひとつの総括 ～「脱リアル」社会が生み出したコミュニケーション

「分かったつもり」とは、本当は分かってはいないこと。しかしそのように指摘されても、「分かったつもり」の人には、何を言われたのかすら、恐らく「分からない」。大げさに言えば、これもある種の現代の病と言えるのかもしれない。この病は、読み方とともに、次の世代に伝染する。それが何世代かにわたって繰り返され、鬱陶しい「リアル」の存在を、ますます敬遠する この「脱リアル」の身体性は、最近の日本人のコミュニケーションのあり方に、大きく影響しているはずだ。

そこで、私たちのコミュニケーションの特徴のうち、特に公共空間における音声表現と関わる問題点について、以下に列挙しておくことにしよう。

##### 音声表現と読解の乖離、ないしは音声表現の低位化

表現と読解は、相互に往還する中で深まってゆく。教育はそのスパイラル的なつながりに着目することなく、むしろ安易でガサツな表現と、本当は浅いレベルに過ぎない「分かったつもり」の読解とをセットにして、もっぱら「効率化」だけを進めてきた。音声表現の大切さについては、否定こそしなかったが、俳優などの世界のことからと、特殊化し趣味化したてまつり、結果としては体裁よく、封印してきてしまった。

このことによって、あたかもすべての読解は音声表現なしでも成立するのだという、漠然とした前提が生まれ、音声表現と読解の乖離、ないしは音声表現の不当な軽視という事態や風潮を、結果として招いてしまった。最大の問題は、「感動に至るための音声表現の方法論」が必要だという着眼すら生まれず、当然のことながら、方法論を

模索するための議論も始まらなかった点である。

#### 言葉や音に対する粗雑なマインドの醸成

音声表現と読解が乖離した教育を受けてきた人たちの身体は、「節まわし」に対する批判的な耳を持ち合わせていない。そのような身体性を持った人たちが、公共空間に音声表現を流そうとする場合に、見逃せない問題をひき起こしている。「意味」で「発話」しようとする方法ではなく、「調子」でやみくもに「読む」。その表現がウネるような節まわしであっても、本人は大して気にもしない。「意味」は聞き手の頭の中で再構成されるはずだという、「聞く人まかせ」のコミュニケーションへの依存症も認められる。この「意味」に対して鈍感で不誠実なマインドが、巷の粗雑なアナウンスに代表される、音声表現の基本モードとなっている。

送り手は、伝えるべき「意味」に「私」をコミットさせず、ひたすら聞き手に依存し、メッセージを丸投げする。一方の聞き手も、受けてきた教育の「成果」によって、似たような身体性を持ち主となっている。だから聞き手は、丸投げされた「意味」を頭の中で再構成するような面倒なことはせず、もっぱら「聞き流す」。こうして「聞き流す身体」が量産され強化される。

送り手・受け手のこうした関係から、「実効を期待しない言葉」、コミュニケーションを目ざす意欲の低い音声表現が、公共空間に垂れ流されはびこっている。試みに渋谷センター街を、目を閉じながら1分間ほど歩いてみるとよい。極めて日本的と言われる「音漬け社会」は、言葉や表現に対して、無責任で他人事のマインドを持った、数多くの身体によって構成されていることが判る。そこでは、発信者も受信者もこぞって、言葉を文字を、ないがしろにしている<sup>16</sup>。

#### 聴く力の低下

聞き流す身体は、「聞く」力はもちろんのこと、能動的な「聴く」力、つまり「論理を耳で読む」力の低下をひき起こす。おのずと批判力も乏しくなる。「聴く」とは、批判的に聞くことに他ならないからである。

例えば立候補者が演説する選挙という公共空間において、聞き流す身体を持った有権者に、適切な「民意」を示せるだけの聴き方が、はたしてできるのだろうか。

以上、公共空間における、音声表現やコミュニケーションにまつわる3つの問題点を例示した。他にも「指示待ち人間」の量産など、いくつか挙げることができるが、別の機会に譲りたい。

### 5. 2. 国語教育への提言～アナログ的な言葉教育

「脱リアル」とは、言葉の活字化によって、「意味＝リアル」といった、言葉自体が持つ



「身体性」を、いったん休眠状態におくことでもあった。だから「脱リアル」とは、言葉に備わる身体性の体温を下げる、言いかえれば、言葉のリアルがはらむ動きを止めるという意味で、「脱アナログ」であり、ある種のデジタル化でもある。その意味で、この稿で進めてきた議論は、デジタル的教育への批判ともつながり、逆にアナログ的教育のすすめという側面も持っているわけである。

まさしく現代は、効率を旨とした日本の教育が行き詰まりを見せている。にもかかわらず、21世紀は、ますます効率とスピードの時代になってゆく。放っておけば、教育がさらなる効率化を、「結構なことですから」と、やみくもに目ざさないとも限らない。ここは踏ん張って、「意味＝リアル」の重要性について、しっかり考えるべきタイミング（ターニングポイント）である。

デジタルマインドの時代を生き抜く力をつけるためには、「意味＝リアル」というアナログ世界への着眼という逆説こそが、重要な意味をもつのではないか。デジタル時代だからこそ、活字の中から「リアル」を自由に解き放ってやれるだけの表現論が、国語教育の中で模索され、その成果が学習者に施され、社会の中で共有されてゆく。そのことが望まれる。これが、この稿から抽出される提言である<sup>17</sup>。

そのような考えを鼓舞するような発想が、「21世紀 日本の構想」懇談会（2000年）の報告書の中に含まれている。報告書では、「義務化されるべき教育」と、「サービスとしての教育」が、これまでは混交され、教育の力を弱めてきたという、現状への批判的認識をもとに、この2つの教育の分野を明確に区別すべきだと強調している。今後それぞれの教育分野が、特に「サービスとしての教育」が、アナログの言葉教育についてのメニューを用意できるのかどうか、具体論の議論と登場が待たれる。言葉が発する「リアル」の、把握と解放に重きをおく、この稿で言う「アナログの言葉の教育（立体的な言葉の教育）」の出番を期待したい<sup>18</sup>。

## むすび

感動を伝える「作品」の音声表現には、「言葉の適切な演奏法」が必要であり、演奏の仕方のさらなる工夫によって、平たい読解から、深い感動の発見に至ることができる。効率主義的教育現場は、このようなエネルギーが必要な読解の必要性には着目せず、もっぱら言葉を「節まわし」で読み進める身体をつくり出してきた。その身体が、社会のあちこちで問題をひき起こしている。加えて、先人が遺した「感動の世界」の前を、節をまわしながら素通りするという「非効率」に陥っている。

この稿を通して、戦後の効率社会が生み出した、国語教育の問題点（音声表現の方法論の不在）と、その克服のための有効な手だてのひとつが示せたはずである。

<引用および注>

- 1 中沢正夫・木村晋介・丸山重威『非効率主義』（萌文社2002年）のP10～20など
- 2 「脱リアル」＝例えば、蛍光灯に照らされた明るく白い清潔な室内は、それはそれで「戦後の新しいリアル」ではあった。しかしその空間からは、例えば「ものかげ」が失われ、どこもかしこも明るくすべすべになった。このプラスチックのような質感にも、戦後の日本が目ざした「効率社会」が象徴されている。歴史や風土性を薄めようとする、ひとつの意図を持った効率化の追求を、本稿では「脱リアル」と呼ぶ。
- 3 三浦展『「家族」と「幸福」の戦後史』（講談社1999年）および、桜井哲夫『ことばを失った若者たち』（講談社1985年）の随所に語られる、戦後社会に対する基本的な認識を参考にした。
- 4 「黙読の音声化」＝黙読している時の、頭の中での読みを、同時に声にも出すこと。
- 5 「言葉の適切な演奏法」の、より具体的な点に関しては、3・1と3・2において解説している。
- 6 既述の通り、戦後の国語教育の現場では、音声の重要性への認識から遠ざかり、音声化のための方法論が大切なのだという「着眼」すら失われていた。それさえもないわけだから、方法論の検討も、共有も、実践による検証と練磨も行われなかった。したがって、今からその作業を開始しようとしても、大きなマイナスの地点からの出発を余儀なくされる。今日ようやくにして、音声による表現が大切だと気づき始めた国語の教育現場は、音声表現を省みてこなかったツケの大きさについて、まずはよく認識し、目標から視線がブレることのないよう、心して出発すべきだと考える。
- 7 金魚売りなど、昔の売り声の音楽性は、洗練に向かう契機を持っていた。肉声だけで、気持ちを公共の広い範囲にあまねく届けるには、その節まわしの音声表現は「芸」の域に入る必要があったからだ。修行を積むという、洗練を実現するための方法と回路も存在していた。しかし70年代に入り、家々にアルミサッシュが装着され、遮音性が高くなり始めると、サッシュを暴力的に通過させ、「効率的」に伝達しようという発想が生まれ、売り声は、マイクとラウドスピーカーの粗雑な音響と組むようになった。以来、売り声の「音楽性」が、洗練の回路にむかう可能性は極めて低くなり、グロテスクな「節まわし」に堕している。今や道端に軽自動車をとめた焼き芋売りが、自分はマンガ本を読みふけり、大音量の売り声を、「できあいの録音テープ」をまわしっ放しにし放出している状況である。駅のアナウンスも含め、再び洗練に向かうためには、適切な方法論の提示と、それを身体化してゆこうとする強い意思と実践とが必要である。しかし今日の実情を見れば・・・売り声が洗練に向かう可能性は、極めて乏しいと言わざるを得ない。
- 8 このアナウンスの録音は、JR東日本の各駅に設置されたエスカレーターの、昇り口などにおいて、現在もエンドレステープによって流されているものである。「お乗りの際は...お乗りください」と言葉が重なっているが、毎日このままで流されている。録音はスタジオで行われ、JR東日本側が用意した原稿を元に、フリーの女性アナウンサーが

音声化を担当している。

- 9 「リアルに発話する」ための方法については、次の3.2.でも述べている。
- 10 繰り返しになるが、文章を音声化する場合に、「リアルに発話する」姿勢が大切だと強調するのは、決して高度な表現技術を述べようと意図したものではない。ごく自然に、ごく普通に文脈に沿って話しているときの、日常の当たり前の意識。それが、どのような発話のカタチと結びついているのかについて、説明しようと試みたまでである。エスカレーターを前にして、自分がまさに「エスカレーター」と言わんとしている、その場面・文脈の中で発せられる「言葉の意味」を、その意味のとおり、ごく普通に発話するときの、「当たり前」のメカニズム。それを語るための意識ポイント＝キーワードが、「リアルに発話する」という姿勢なのである。
- 11 「エスカレーターにお乗りの際は」以降を見てみると、「手すりにつかまり」のまとまりの部分では、上段も下段と同じく、傾向としては右肩下がりになっている。しかし、「黄色い線の内側にお乗りください」の部分については、上段グラフではしきりにウネる曲線を描き、なかなかイントネーションが下がってこないのに対して、リアルに発話した下段を見た場合には、全体としては右肩下がりの傾向が認められる。
- 12 「手すりにつかまり」の部分も、「黄色い線の」も、また「内側にお乗りください」に関しても、上段のグラフに示された駅の録音アナウンスでは、あちこちに山坂が出現し、なかなか右肩下がりになっていない。
- 一方リアルに発話した場合は、各部分にも全体にも、傾向としての、右肩下がりが認められる。
- 13 効率主義のマインドにとって、このような作業はとてつもなく非効率で、おっくうなものに映ることだろう。だから次第に、正面からリアルを相手にしなくなるという、「悪循環」に陥ってしまうのが常である。
- 14 筆者が、まど みちお氏に直接確認したところ、まど氏の意図もまったく同じであった。そのこともまた、別の意味で感動的な体験であった。
- もちろん、作者の気持ちと、いつでも必ず一致するとは限らない。しかしそういう場合であっても、作者の言葉を、自分の肉声を通して、自らの生き方と重ねようとする読解の試みは、その人にとって意味ある発見をもたらす。場合によると、作者の無意識の世界にアプローチしてしまう、つまり「作者を超える」可能性すらもはらんでいる。畏れ多いことではあるのだが。
- 15 活字化された書き言葉を、「読解」することに重きをおいてきた教育は、本当に「効率性」を実現できたのだろうか？ 本当はそうではなく、たくさんの「作品」の、奥深い世界、宝の山の前を、単に素通りしてきてしまったのではないか。それは、「究極の非効率」なのではないのだろうか？
- 国語教育はいま、「効率」の尺度には、2つの種類があると考えたべきではないか。これまで追及してきた「効率」以外にも、教育の現場でしばしば実現されるべき、もうひとつの「効率」のあり方が存在するということ。人に伝える価値のある作品世界と「私」

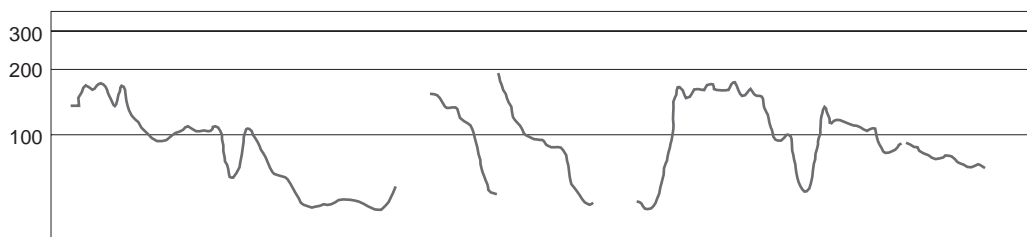
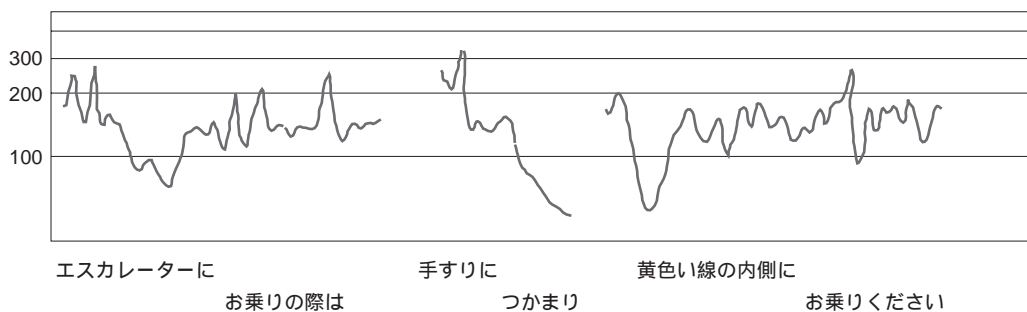
とが、コミュニケーションできること。それこそが、「真の効率性」と呼べるものなのかもしれないこと。「リアル」や「意味」への謙虚さを持つ身体こそが、活字化された言葉を、立ち上げ、解き放つ力を持っている。

- 16 中島義道『うるさい日本の私』（洋泉社1996年）および中島義道・加賀野井秀一・C.J. ディーガン・池村弘之ほかの『静かさとは何か』（第三書館1996）など。特に「やさしさの論理」「実効を期待しない言葉」「音漬社会」など、同書の随所にしばしば登場する概念を参照した。
- 17 柳田邦夫『壊れる日本人』（新潮社2005年）のP58～74を参照。
- 18 座長・河合隼雄による「21世紀 日本の構想」懇談会の報告書（2000年）または『日本のフロンティアは日本の中にある』（講談社2000年）の第5章・ を参照。

#### エスカレーター利用者への呼びかけアナウンスの音声分析

（NHK放送技術研究所にて分析）

エスカレーター昇降口に流されているアナウンス



「リアル」な発話によるアナウンス